九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

川上未映子『乳と卵』の教材としての可能性 : 解釈をめぐる演習の授業実践報告

岩下, 祥子
北九州工業高等専門学校 : 講師

https://doi.org/10.15017/2344811

出版情報：九大日文. 33, pp.93-100, 2019-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

川上未映子『乳と卵』の教材としての可能性

――解釈をめぐる演習の授業実践報告――

岩下（IWASHITA） 祥子（sho.k.）

1、はじめに

川上未映子『乳と卵』（「文学界」二〇〇七年一二月号）は、第一三八回芥川賞受賞作品であり、既に歌手としてデビューしていた作者の知名度も相俟って当時話題となった[1]。『乳と卵』は大阪の京橋でホステスをして生計を立てる巻子（三九歳）と緑子（一一、二歳）母子が上京し、巻子の妹「わたし」の台東区三ノ輪のアパートで二泊三日を過ごす物語である。地の文は「わたし」によって語られ、そこに度々緑子の独白である「ノート」が挿入されるが、語り口は全編に渡って関西弁である。

タイトル『乳と卵』の大枠の解釈としては母子の上京目的である巻子の豊胸手術（乳）と、初経を目前に控えた緑子（卵）を端的にあらわしていると考えてよいだろう。また巻子、緑子に加え「わたし」の名前に「夏」の字が用いられていることや、台東区（旧下谷区）という舞台設定からも本作が樋口一葉『たけくらべ』のオマージュであることは明瞭である[2]。リンクするのは構成の仕掛けのみではない。物語終盤、緑子が吐き出す「厭、厭、おおきなるんは厭なことや」には無論『たけくらべ』美登利の「ゑゑ、厭や厭や大人に成るは厭やな事」が重ねられており、女性が大人となり生きていくことの名状しがたい苦しみを現代に場面を移して彷彿させる。名作との関連から文学史への招致の点で、また成長期の少女の心理描写は学生に多く共感されるとも推察され、教材として魅力の多い作品である。一方で、生理用ナプキンや経血の描写、豊胸手術を求める巻子の視点から女性の乳房・乳頭の色形を品評するような場面もあり、女性の身体の特性とその個性が堂々と描かれた面に興味が集中したり、または表現の意義を考える以前に学生が引いたりしないよう、作品全体と個々の場面の表現との両方を見ることの重要性にも注意を促したい。

『乳と卵』は実際に教材として高校生の現代文の学習教材『新読む力・考える力を高める現代文学名作選』（明治書院、二〇一六年二月）に初版（二〇一二年一月）から収録されている。掲載されているのは物語終盤、泥酔した巻子の前で緑子の感情が溢れ出し、母子それぞれが自分の頭に卵をぶつけていく場面とその前後である。緑子が自分の身体の成長を厭う文脈を追うためには全文掲載が望ましいところであるが、紙幅に限りがあるため一部抜粋は仕方がない。また、学生は緑子という子どもの視点に立ちやすく、母に対して寂しさや怒り、反感、愛情が入り交じる複雑な感情を全身でうったえるこの場面には共鳴もあるだろう。登場人物の心理を理解し説明する試みには妥当な抜粋であ

ると言えるだろう。この教材への採用は『乳と卵』が学生にとって読み考える何かがあるということを示すだろう。

教材としての可能性の先行論としては野澤涼子「川上未映子「乳と卵」の授業実践――語り・身体・イメージをテーマに――」（『学芸国語国文学』五〇号、二〇一八年三月）による報告がある。野澤の授業例は、東京都内の女子大学の学部二、三年生を対象とした演習である。最初に発表担当者が各々「語り」「身体」「イメージ」の各回のテーマの下で報告し、発表後全体討論で議論を深めている。この受講生達は無論全員女子学生であり「元々ジェンダー／セクシュアリティに関する興味関心を強く抱き、ジェンダー理論についても学ぶ機会が事前に与えられている」ということで生物学的性差、社会的性差への理解が下地にあった。故に、巻子、緑子、「わたし」という年齢も立場も異なる三人の女性に「産む性」という共通項を設定し全体討論の基軸としている。野澤は「もし男性受講者が参加していれば、悉く男を排除したテクストに嫌悪感や疎外感を感じる者や、外在的にしかテクストを理解できない者があらわれ、読みが朧化されてしまった可能性を否定できない」と、一つの可能性として学生の深い洞察には受講生の性別が関係していることを示唆した。

本稿では、男子学生が総学生数の七割強を占める国立工業高等専門学校において実施した『乳と卵』の解釈をめぐる演習の実践報告を行いたい。受講者は四〇名（内男子三八名、女子二名）、講義名は「日本文学論」で、本科四年生の半期選択科目である。授業の実施期間は二〇一八年一〇月～二〇一九年一月、同時間に開講される五つの講義の中から受講者は全員「日本文学論」を第一希望として選択し受講した。とはいえ、高専の学生の大多数が中学生の時から理系科目に秀で、国語や文学を自称不得手としている。且つエンジニアを志し「ものづくり」を得手とする学生であるため、今回の演習は「現代文学を同時代に解釈する」と説明し、大袈裟ではあるが「新しい解釈がこの授業で出てくるかもしれない」と言って興味を引くよう心がけた。先行論が少数あることは事前に伝えており、それらに関しては授業担当者もある程度を揃えているため教員室で閲覧や複写に応じることを約束した。しかし、考察に向けての着眼点は学生の個々によることや、いずれ学生も専攻分野で卒業論文を書くことを踏まえ、先行論の配布はせず、論文探索の方法を教示した。先行論の重要性は発表初回の教員担当の報告で理解させつつ、学生が発表に柔軟に取り組めるよう、如何なる視点でも構わないから筋道の通った発表を一つ作ってくるよう指示した。自分が引っかかりを覚えたところを掘り下げて考察し、必ず物語解釈に還元するよう指示して取り組ませている。

テキストは芥川賞受賞作品として発表された「文藝春秋」八六巻三号（二〇〇八年三月）掲載文を用い、初回のガイダンス時に配布した。作品全文を予めこちらで一四分割し、一番初めは教員が担当した。これは文学作品の考察方法や発表の流れを学生に掴んでもらうことと、発表の準備時間の確保のためである。受講生の発表は一回に三～四人、一人一五分～二〇分で、各発

表者の発表の後に質疑応答、全員の発表の後に全体討論を行った。本授業の評価割合は、授業態度（発表点＋質問点）五〇％、期末試験五〇％であり、発表点は態度と内容、質疑応答の仕方などを評価することを伝えた[3]。到達目標については授業開講前からシラバスにて確認可能である[4]。

やはり文学とは専攻分野が大きく異なる学生であるため、担当箇所の要約や、比較的易く読み取ることが出来る心理描写の説明を「解釈」として提示する学生も少なくなかった。しかし、今回の授業実践を通して言えることは、個人差はあれど男子学生が「外在的にしかテクストを理解できない」ということは断じて無いということである。無論性差は「読み」に影響するであろうし、男性読者が女性読者のように『乳と卵』を読むことは難しいことであるが、逆も然りである。野澤の報告とは大きく異なる土壌での演習であるが、それ故の新しい気づきもあったため、本稿で報告を行いたい。工学専攻の学生達が現代文学のテクストに向き合い、自分なりの勘所・核心を定めて、そこに向けて担当箇所の表現や描写を掘り下げてアプローチを行っている。本稿で取り上げる学生の考察は、担当箇所は異なるが共通して〈中身〉ということに着目している。本作は緑子の大ノート（モノローグ）が幾度も挿入されるため、本心という意味で〈中身〉を必然的に内包していることは言うまでもない。しかし、その小ノートの本心が強固に〈中身〉たり得ているのは、それを補う作用が小説の中にあるからではないだろうか。緑子が抱えている〈中身〉は自ずと物語終盤の「ほんまのこと」を明らかにしたいという希求へと繋がる。以下、『乳と卵』にほのめかされる〈中身〉をめぐって、高専における現代文学の演習実践例として報告を行う。なお本文の引用はすべて「文藝春秋」八六巻三号（前掲）に依り、引用末部に頁数を記載している。

2、ロボコンと緑子による補色の構造

緑子が外面と中身との相違について意識的に書いているのが「ロボコン」である。緑子はお使いで来たイズミヤの地下で、幼少時に乗っていたロボコンの遊具（硬貨を入れたら動くもの）と再会する。昔は大きかったロボコンが、自分の成長ゆえに小さく感じられ驚いた緑子は更に、当時ロボコンの中に入っていたときのことを思い出し綴る。

> いま、お母さんとおばあちゃんには、ロボコンしか見えてないねん。あっちからはロボコンやねんな。でも中身は、ほんまはあたしが入ってる。その日は一日不思議な感じやったのを、覚えてる。あたしの手は動く、足も動く、動かしかたなんかわかっていないのに、色々なところが動かせることは不思議。あたしはいつのまにか知らんまにあたしの体の中にあって、その体があたしの知らんところでどんどん変わっていく。（三七〇～三七一頁）

緑子の回想に出てくる「ロボコン」は石森章太郎原作「がんばれロボコン」（週刊少年サンデー」一九七四年八月～一九七五年四月）のキャラクターであり、人間にサービスすることを仕事とするロボット・ランドのロボットである。人間の一家大山家に引き取られ、そこで繰り広げるロボコンの悪気の無い失敗が常にマンガの題材となっている。やる気が空回りし惨事を引き起こしてばかりのロボコンであるが、一人前のロボットになるため、めげることなく人間へのサービスに励み続けるのである。(5)

演習第四回目の範囲はこの緑子の小ノートの記述から、巻子と「わたし」が銭湯へ出かけ湯に浸かるところまでであった。発表担当者の一人は「ロボコン」に着目している。まず「ロボコンめっちゃ大きかったのに久しぶりに見たらすごく小さく感じれて」（三七〇頁）という緑子の所感に、身体の成長の自認と悲哀とが読めることを指摘した。

では、なぜロボコンはこの場に挿入されるのだろうか。発表者は会場に特撮番組「がんばれ!!ロボコン」（NETテレビ系、一九七四年一〇月～一九七七年三月）のオープニングテーマ曲を実際に流し、曲調と歌詞が溌剌としていることを示した。更に、ロボコンのボディカラーの赤と、緑子の緑とは補色の関係にあることにも言及し、これらの要素から、ロボコンは緑子と対置されていることも明らかにした。発表者は緑子の大ノートの「いま、お母さんとおばあちゃんには、ロボコンしか見えてないねん。あっちからはロボコンやねんな。でも中身は、ほんまはあたしが入ってる」（三七〇頁）という記述から、緑子は自分のことを母の理想の我が子像（ロボコンのような明るく溌剌とした子）ではないと考えているのではないかと述べた。ここでのロボコンの思い出の挿入が緑子の「なんであたしを生んだん」（三七九頁）という主張を支えることを考察結果として発表を結んだ。

作品に用いられたアイテムから解釈を導く発表が本授業で初めてなされ、受講学生の感想は着眼の機転について褒めるものが多かった。会場からは「生まれない方がよかったという点に繋げるのは無理があるのではないか」という質問もあり、このような解釈幅の個人差は文学作品の解釈を共有する場合はおのずと出てくるところであるだろう。巻子が外面のロボコンを見ていることが、中身の緑子を見ていないことを証すとなると論は極端であり、それを心理的な意味にまで拡大させると更に確証には至らない。しかし子どもの、引いては人間の心理が論理性に欠くからこそ、緑子の感受の内側で、本当の自分を見ていないという短絡的な結論を持つ可能性は否めない。ロボコンは「いつか必ず成功して、人の役にたった印のハートマークをたくさんもらって一人前のロボットになる」(6)という信念を持っている。緑子もまた「手に職をつけなければならない」（三七九頁）や「早くお金とか、と息を飲んで、あたしかって、あげたい」（三九六頁）に明らかなように、一人前になり母の役に立ちたいと思っている。そうすると、ロボコンは〈緑子が想像する巻子の理想の我が子像〉よりも、その考えを経由した〈緑子の内面の鏡〉とは言えないだろうか。補色は混合すると無彩色になる。「緑子」とは作品内の少女の名であり色彩ではない。緑

子という人物像を緑色の静的イメージに閉じ込めることはできない。それを示すためにロボコンは補色の赤と動的イメージとともに挿入され、それが緑子の内面にもあることが示されたとき、緑子は彩色されない「緑子」となるのではないだろうか。

一見関西の描写に色を添えるイズミヤでの回想であるが、ロボコンのキャラクターの個性からいえば看過し得ない。当初学生はロボットコンテストと関連すると思い調べ始めたという。高専生なら当然と言えよう。しかし、それを機に「がんばれ!!ロボコン」を知り、その特色と緑子の思考がどのように絡まるのか、考察を楽しく進めたということであった。この学生は元来特撮好きで、その面でも興味を惹かれてのロボコンを対象とした考察であった。ロボットコンテストや特撮への興味などにきっかけを持つことは、男子学生の方が可能性が高いかもしれない。野澤論を踏まえると読者の興味がおもむく点に相違があり、面白く感じられる。

3、語り手によって守られる「ほんまのこと」

『乳と卵』の終盤は、緑子と巻子の「ほんまのこと」の問答が続く。「ほんまのことを、ほんまのことをゆうてや」(三九五頁)「お母さんはほんまのことをゆうてよ」(同)と緑子の真剣な問いかけに対し、「いややわ、なによほんまのことって」(同)、「びっくりするわあ、ほんまのことってなにやのよ」(同)と巻子は取り合わず、「わたし」は「誤魔化す巻子はあかんと思った」(同)と心中を語りに乗せている。しかし、そこから緑子は感情が爆発し、玉子を自分の頭にぶつけながら内側につかえているものを吐き出していく。巻子もまた自分の頭に玉子をぶつけ「緑子の知りたいほんまのことって、なに」(三九七頁)と問いかける。

> 緑子、ほんまのことって、ほんまのことってね、みんなほんまのことってあると思うでしょ。絶対にものごとには、ほんまのことがあるのやって、みんなそう思うでしょ、でも緑子な、ほんまのことなんてな、ないこともあるねんで、何もないこともあるねんで。(三九七頁)

緑子が知りたがった「ほんまのこと」とは何であったのか。大石千晶は「緑子のいう〈ほんまのこと〉とは、緑子が巻子に対して聞きたいいろいろなことの総称」と捉えており、「具体的な内容を指し示すものではな」いという[7]。そして、ここでの「わたし」(夏子)の役割について次のように述べている。

> ここでは、確かに存在するが言葉で言い表すことが出来ない〈ほんまのこと〉というものがあり、それが母娘のわだかまりの原因となっていることに、夏子だけが気がつくのである。このように、夏子は母娘の対立をただただ見守る人物などではなく、母娘を和解へと導く人物として登場したのではないだろうか。[8]

大石の述べるように「ほんまのこと」はおそらく具体的何かではない。そして勿論「わたし」は緑子と巻子の間で交わされる「ほんまのこと」に対し、至近距離で第三者の眼差しを持つ人物である。しかし、その存在が「母娘を和解へと導く」（傍点引用者）と言うまでには「わたし」が「ほんまのこと」に主体性をもってアプローチしているようには受け取りがたい。では「わたし」はこの場に必要ではないのか。

本授業でこの箇所の発表を担当した学生は語り手に着目した。発表者は「ほんまのこと」は「ほんまのこと」でしかないという立場であり、「ほんまのこと」に対しては大石論と同様の見方である。発表者は母娘の「ほんまのこと」の合戦を、生きるとは「ほんまのこと」を伝えたり、知ろうとしたりすることで、互いの「ほんまのこと」が分からないということは人間の、巻子・緑子母娘の前提であると解釈し整理した。緑子と巻子の間で「ほんまのこと」の問答がなされるからには、それがわからない第三者の「わたし」の語りが必要である。答えを知らない語り手の語りによって読者は巻子と緑子の間に交わされる「ほんまのこと」に思いを巡らすことができると、語り手の効果を指摘した。更に「作中人物でない語り手でもよいのでは？」という会場の質問を受け「三人称の語り手は神の視点にもなり得るため、〈ほんまのこと〉を知り得る語り手はこの作品に適当でない」というところまで論を深めた。作者の川上は、

> 絶対的な答えはない中に対立や拮抗だけがあって、それが読んだ人の中で何らかの形で生かされる、哲学で言えばアウフヘーベン＝止揚ですね。そういう動きや運動に私はビューティフルなものを感じるし、今の私にはそれが最も信頼できる小説の形なんやと思う。(9)

と、述べており、止揚には自身が信じる「小説の形」があることを明かしている。川上の言葉が真であれば、「わたし」という語り手の設定が「ほんまのこと」を揺るぎなく「ほんまのこと」のままにするという発表学生の指摘は、当時の川上の小説作法を感受しているとも言い得る。事前に川上の発言については受講者全員に紹介していたが、発表者は自分の発表と繋げることはしなかったため、その点は教員から指摘した。このような不足があり発表は十全とは言えないものの、構成が物語の核心部に作用することを学生自らが気付き、それを発表するまでに、学生が作品に向き合えたことを重要なことと捉えたい。

4、まとめ

本稿では『乳と卵』の教材としての可能性を、演習形式の授業における学生の考察視点を踏まえて模索した。『乳と卵』には女性の身体とはいかなるものか、登場人物を通してその内的実感と外的評価が描かれる。故に野澤論では、男性読者につい

て「嫌悪感や疎外感を感じる者や、外在的にしかテクストを理解できない者」がいる可能性が想定されたのかもしれない。その可能性は否定しないものの、すべての男性読者に言えることではないだろう。

「ロボコン」の中から巻子を見た緑子の描写を、親の理想でありたいと願う子どもの心理が表象されていると読むのは、性差を問わない共感力である。また、身体の成長に戸惑うのは女子だけではない。本作の主題となる「乳」や「卵」とは異なっても、身体の成長から大人になることへの重い実感は男子にも少なからず認められるはずである。まったく同一のものでなくとも自分の実感の糸をたぐり寄せ、作中の緑子の心理の理解に学生は努めた。

「ほんまのこと」とは何かという模索から、語り手を検証する視点も、学生がテクストと向き合って体得した発想の転換である。「ほんまのこと」とは「真実」や「本当のこと」、「内実」ではなく「ほんまのこと」である。「ほんまのこと」を言語化しようと努める当人達（緑子、巻子）が語り手となってしまうと、母娘の相互間の拮抗、接近に対して読者が均一な距離が取れない。「ほんまのこと」という身内の関西弁の温度を保つ語り手、全知ではない一人称の語り手、巻子と緑子の「ほんまのこと」を大切に思える語り手として、『乳と卵』は「わたし」にしか語り得ない作品である。

本稿で大きく取り上げたのは二名の学生の発表であるが、他の学生も興味深い考察を行っている。帰宅が遅い巻子を案じる緑子の小ノートの筆記が「じこ、ゆうかい」「びょーいん」等、自然に焦燥が滲んでいることに目を向け「頑なな殻がひび割れていく」と玉子になぞらえる発表もあった。緑子がシンクにフレンチドレッシングを流す場面では「その真っ白のどろりとした液体」（三九四頁）という表現から精液（或いは父親）の喩と捉えた学生もいた。この指摘は、直後の「水道の勢いをほとんどゆるめて」（同）や「緑子の手首から腕はあまりにも細く」（同）という表現と照らし合わせると、男性と対置したときの女性の生きづらさに少女の緑子が既に圧迫されているようで、「たけくらべ」に似た表象と読み取れるだろう。前章までに紹介した発表も含め、本稿で紹介したものはいずれも男子学生の発表である。

以上のことから『乳と卵』は、性別にかかわらず文学教材として十分活用されると言えるだろう。教科書への掲載が作品の一部となることはやむを得ないが、本授業において学生は『乳と卵』全体を読むことに意欲的に取り組み、作品読解を楽しむ姿勢が見られた。女性性というテーマ性が女性に読まれることの意義の大きさと同様に、あらゆる性別の読者が読み、考えることの意義は大きい。今回の演習においても、作品の場面によっては担当者が排卵や月経についてよく調べ発表し教室で共有した。それはロボコンや語り手を検証することと同じベクトルで、作品に何が書かれているのかをより深く可能な限り十全に理解したいという欲求である。川上弘美は芥川賞選評時に、候補作品すべての中から緑子に「もう一度会いたい」と述べてい

る。[10] 学生もまた、緑子の心理に理解を示す読後感を持つ者が多かった。登場人物に対して沸き上がる素直な思いを教員側が肯定し、その感受の重要性を保証することが演習形式の授業ではなお肝要であるかもしれない。そうすることで、学生は小説に自分の感受性をもって向き合い、作中の言葉、描かれた心理との交感を実践する。教材としての『乳と卵』は緑子を通して学生を作品世界に招き入れ、そこにちりばめられている独特の表現、描写、あるいは構成への問いかけを積極的に試みることが可能な作品であり、学生の文学探究に有用であると言える。

【注記】

1　受賞者インタビュー「家には本が一冊もなかった」（「文藝春秋」八六巻三号、二〇〇八年三月）

2　注1に同じ。

3　評価の指針として市坪誠『授業力アップ　アクティブ・ラーニング』（実教出版、二〇一六年五月）を参考にし、学生にも評価の基準としたことを伝えている。

4　シラバスに設定した到達目標は以下の通り。「1、日本語・日本文学について積極的に関心を持つことができる。2、必要な情報を収集・整理し、的確に文章にまとめることができる。3、相手の意見を理解・要約し、建設的かつ論理的に自らの考えを構築できる。4、社会で使用される言葉を広く習得し、それらを適切に用い、社会的コミュニケーションとして実践できる。」

5　石森プロ https://ishimoripro.com/（二〇一九年三月五日閲覧）

6　注3に同じ。

7　大石千晶「川上未映子「乳と卵」論――形なきものをどう伝えるか――」（「愛知大學國文學」五六号、二〇一七年一月）

8　注7に同じ。

9　「ポスト・ブック・レビュー著者に訊け！　川上未映子『乳と卵』」、「週刊ポスト」四〇巻一一号、二〇〇八年三月

10　川上弘美「もう一度会いたい人」（「文藝春秋」八六巻三号、二〇〇八年三月）

※本稿は、北九州工業高等専門学校二〇一八年度四年生を対象に行った授業を下に、学生の承諾を得て執筆した。この場を借りて受講学生に御礼申し上げる。

（北九州工業高等専門学校講師）